書評・図書紹介

保坂俊司 著

『戒名と日本人』

――あの世の名前は必要か』

祥伝社新書、二〇〇六年

加島 亮伸

本書は、「第一章　戒名とは何だろうか」「第二章　仏教史から戒名を考える」「第三章　日本人の霊魂観と戒名」「第四章　墓や位牌と戒名」「第五章　戒名は必要か」の五章からなる。タイトルからして、日本について多くの紙幅が割かれているのは当然であるが、仏教の「戒名」「戒律」をキーワードに、インド・中国・日本の仏教史を通観した書、あるいは仏教概論とみてもよい。著者自身も「仏教の発展の歴史は、思想の展開の歴史であると同時に、戒律改変の歴史でもあります」と記されている。

さて、現代日本の仏式の葬送において、死者が授かる戒名は、死後の名前として日本人に浸透している。しかし、本来であれば、仏教に則った生活を誓ったことの証として、「戒名」をいただくのが、その意義であるはずである。著者も、インド本来の戒名は、戒律の意味を理解し、その尊厳を誓った仏教者が出家の際に授かる、生前の名前であったとしている。

なぜ、現代の日本において、生前の出家信者の証である戒名が、自身が仏教者であるという自覚の薄かった（あるいは全く無かった）死者に授けられるようになるのであろうか。また本来、財力は戒名の格には関係ないが、日本社会一般では、いわゆる「戒名料」が問題とされてきたのはなぜなのか。著者は、「それは古来から死の穢れを恐れてきた日本人が、仏教を世俗的に変化させ、時代を超えて受け継いできた文化の蓄積だ」と主張される。また、「戒名の存在意義を問うことは、仏教や葬送儀礼の歴史を理解するにとどまらず、日本人の死生観の真髄に触れることにもなる」とも言われるのである。

中国仏教においては、いわゆる「悟り」の場を日常の生活にまで降ろしてくることが可能となった。このことは、中国仏教がすでに大乗であったことを意味するが、民衆の生活にまで浸透していたとはいえない。

続く日本仏教において最澄は、奈良仏教に対して「大乗戒壇独立」を宣言した。著者はこのことを「インド以

来の仏教の戒律と教えのねじれ現象を解消するという画期的なものであった」と説明される。つまり、最澄が自ら奈良・東大寺の戒壇院にて受戒した小乗戒を棄捨したこと、そして大乗仏教の菩薩戒を主張したことは、インドの伝統的な小乗戒がすでに中国において理論上否定されていたにもかかわらず、日本においても相変わらず、授けられ続けていたからであるとされる。

やがて、最澄が開いた叡山仏教からは、鎌倉仏教の祖師方を輩出する。その内の親鸞に至っては、「南無阿弥陀仏」の一声で救われると主張し、戒律などの自助努力は不要となった。

そして、江戸時代となり、与えられた職業のすべては救いの道と同一視できると考えられるようになる。つまり、特定の職業に限定する第一段階（華道、茶道、能などの宗教性の高い世俗業）、すべての職業が悟りへの道であると考える第二段階の順序はあったものの、最終的には、日常世界における諸行、特に各種の職業を悟りの道にまで高めることができるようになったのである。その提唱者が鈴木正三で、「世法即仏法」「世俗業即仏業」の思想へと至り、『万民徳用』において、「この世の生活の一切は、仏道修行となる」といっており、その考えは、日本人が、仕事に報酬を得る手段以上の意味を見出していることに影響していると述べられている。

生と死はセットである。生まれっぱなしということはない。著者は、

「死を特別に忌み嫌う日本文化においては、死者は、死の世界の住人として、隔離しなければなりません。死者が生前の名前を使っていたのでは、居心地が悪いのです。そのため、死者の名前としての戒名は好都合でした。それをもらえば仏の世界で、安楽に暮らせるということになっており、残された者も死者の霊に脅かされることなく住み分けができます」

と述べられている。

私の身近に「生前戒名」（逆修）を授かることにより、普段の生活にメリハリができ、自分のいのちが輝いていると感じられるようになったという方がいる。はたして、自分の死後の名前は何になるのであろうか。

本書によって、あらためて日本仏教の本質を知ることができるとともに、そのような思想の中に先祖を含めた私も生きてこられたことに喜びを得られる書である。

多くの方に一読をおすすめする次第である。